

# 平成18年度 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 公開講座募集要項

主催：名古屋大学大学院国際言語文化研究科

## 恐怖を読み解く — 日々からの生活から国際政治まで —

最近よく耳にする言葉に「テロリスト」があります。これはテロル（恐怖）を引き起こす人というほどの意味であり、地下鉄の乗客も議事堂の政治家も、ロンドンでも名古屋でも、みな恐怖に直面しているわけです。人間はずっと恐怖とともに生きてきました。恐怖の対象も千差万別です。そして恐怖を語ることも、ただ単に感情的に反応しているのではなく、それは、家族や恋人など掛け替えのない人への思い、文学表現や歴史認識、宗教信条、それに政治的主張や社会的不満など、様々な要素と連関しています。きわめて個人的に見える一つの恐怖の表明も、それを掘り進んで行くと、時代や地域、さらには一つの文明の特徴さえ明らかになってきます。

6月14日(水)第1回	<b>開講式</b> <b>■疾病と医学と：日常の恐怖</b> キーワード：恐怖、伝染病、死、医学、治療、ペスト、結核、コレラ、梅毒 人間には生老病死という苦痛がある。しかし、日常的に病は私たちの人生の大きな蹉跌になる。人類はいつも多くの疾病と戦ってきた。疾病には、天然痘やコレラ、ペスト、猩紅熱などと共に飢餓もあれば飽食もある。苦痛と病臥と、死がその向こう側にはあった。それらの疾病がもたらした文化的意味を、恐怖というキーワードの下で読み解いてみよう。そこには多くの教訓があるはずである。	大学院国際言語文化研究科長 近藤 健二 教授 福田 真人
6月16日(金)第2回	<b>■テロルの構造</b> キーワード：イデオロギー、貧困、政治経済 21世紀に入って顕在化したテロリズムは、しばしば宗教的対立や異なる文明間の対立という図式(例えばキリスト教原理主義対イスラム教原理主義)でもって描かれる。しかしそれは本当だろうか。本講義では、暴力に対する暴力の応酬という悪循環を引き起こしている真の原因、その驚くべき現実の数々を素描するとともに、そうした現実が隠蔽されるその仕方について検討したい。	助教授 布施 哲
6月21日(水)第3回	<b>■現代イギリス社会に見られるマスメディアと恐怖</b> キーワード：リスク社会、テロリズム、新コミュニケーション技術 メディアを恐れるべきか？また、メディア自身恐れているのか？本講座では、現代イギリス社会を対象に、この二つの疑問を解明する。まず2005年のロンドン同時多発事故におけるBBCと『タイムズ』紙の報道を例に、メディアが社会に恐怖心をはびこらせる、その様相と原因を探る。次に、メディア側の抱く恐怖として、表現の自由の抑制に対する恐怖、急速に普及する携帯電話やインターネットなどとの競争に対する恐怖、等を考察する。	助教授 エドワード・ヘイグ
6月23日(金)第4回	<b>■チャールズ・ブロックデン・ブラウンの恐怖小説を読む</b> キーワード：恐怖小説、サブライム、パラノイア 恐怖小説(もしくはゴシック小説)というジャンルはアメリカ文学の伝統のひとつとされるが、そこで恐怖はどのように喚起されるのだろうか。また、文学作品や芸術作品において、読者や鑑賞者によって恐怖が受容されるということは、いったいどのような意味を持つのだろうか。アメリカの最も古い恐怖小説の一つであるチャールズ・ブロックデン・ブラウンの『ウィーランド』(1798)を取りあげ、こうした問題について考えてみたい。	教授 長畑 明利
6月28日(水)第5回	<b>■村上春樹と暴力</b> キーワード：村上春樹、『海辺のカフカ』 村上春樹は、河合隼雄との対談で、『ねじまき鳥クロニクル』では暴力性が大きな問題のひとつであり、主人公が妻を「闇の世界から取り戻すためには暴力を揮わざるをえない」と述べている。それ以降の作品でも、作品中に「暴力」が取り入れられているものが多い。2002年の『海辺のカフカ』の分析を通して、村上春樹の作品の中の「暴力」の意味、機能を明らかにしてみたい。	助教授 西川 智之
6月30日(金)第6回	<b>■グールドはテロリストか？</b> キーワード：クラシック音楽、複製技術、株式分割 カナダ出身のピアニスト、グレン・グールド(1932-1982)は1964年にコンサート活動から身を引く。以後、50歳で亡くなるまで、彼はもっぱら録音スタジオで、レコーディングとテープ編集によってバッハやベートーヴェンの音楽の再創造を实践してみせた。コンサートを時代錯誤ときめつけ、音楽作品の時間概念についての常識をくつがえそうとしたグールドの“実験”は、はたして私たちにとって福音なのか、それとも脅威なのかを検証する。	助教授 藤井たぎる

7月5日(水)第7回	<b>■西洋思想にみる恐怖</b> 助教授 飯野 和夫 キーワード：社会契約、ホッブズ、ルソー、フーコー、デリダ 社会契約説、その影響の大きさ、代表的理論家であるホッブズが恐怖をその理論的基礎としたことなどは教科書的な知識としてよく知られています。やはり社会契約説をとらえたルソーも太初の人類の恐怖にふれています。では、彼らの恐怖をめぐる言説を、現代の思想はどのように捉えたのでしょうか。なるべくわかりやすく紹介したいと思います。
7月7日(金)第8回	<b>■西欧人男性の去勢恐怖と西欧世界</b> 教授 松本伊瑳子 キーワード：去勢恐怖、自我形成、エコノミー、エレヌ・シクスー フロイト・ラカンの精神分析学によると、西欧男性は去勢恐怖によって自我形成しますが、女性にはペニスがなく去勢されることがないので、男性のような立派な自我形成ができません。去勢恐怖に裏打ちされて自我形成した男性は、何かをなくすことを恐れ、所有することに執着するエコノミーを形成すると、エレヌ・シクスーは批判しています。西欧文化と精神分析の女性解釈に対する批判を、エレヌ・シクスーのテキストに見てみましょう。
7月12日(水)第9回	<b>■フランス・ピレネー地方の家族と恐怖—〈善良な未開人〉か?—</b> 助教授 ギャランス・デュクロ キーワード：ピレネー地方、民俗学、直系家族、伝統、家長 1856年にフレデリック・ルプレはピレネーの伝統的な家族について有名な研究を始めた。かれによると、このピレネーの伝統的な家族形態は、家族問題を最終的に解決するための理想的なモデルであった。しかしピレネー地方の人々が生きた現実、本当にルプレが言うように平穏であったのか。ピレネーの家族における権威、またこの権威から生じる恐れについて、ピレネー山中のある村の老人の話に耳を傾けてみたい。
7月14日(金)第10回	<b>■民族の共生と恐怖—ユダヤ人の喜びと苦しみ—</b> 教授 田所 光男 キーワード：神殺し、ジンミー身分、マイノリティ、二級市民、ホロコースト、パレスチナ問題 キリスト教世界を受け継ぐ西欧近代社会やイスラム社会は、異なる人々がともに平和に生きるという共生の理想を掲げ、ユダヤ人はそこで確かに活発に活動することができた。しかしまた同時に、様々な差別や迫害も被らざるを得なかった。『アンネの日記』に記されたような恐怖は、決してこのアムステルダム少女だけの問題ではない。ユダヤ人の恐怖を通して、共生の理念の光と闇を考えてみたい。
閉 講 式	
大学院国際言語文化研究科長 近藤 健二	

開催期間：6月14日(水)から7月14日(金)まで 毎週水・金曜日 全10回

開講時間：18:30～20:00

受講対象者：一般社会人、大学生、大学院生

募集人数：60名(先着順)

受講料：7,200円(「納入依頼書」により郵便局へ払込)

開催会場：名古屋大学 東山地区 文系総合館7階カンファレンスホール(会場案内図参照)

申込締切：5月31日(水)まで [必着]

申込方法：郵送に限ります。

受講希望の方は、募集要項に入っている「納入依頼書」により最寄りの郵便局で受講料をお支払い頂き、その受領証を、「受講票」の「払込受領書貼付欄」に貼り付けて下さい。(納入の際には、所定の手数料が必要となりますので、ご了承下さい。受講料が納入されていない場合は、受講は認められません。)[「受講申込書」に、氏名・年齢・住所・電話番号・職業を、「受講票」に氏名を明記の上、80円切手(返送料)を添えて郵便でお申し込み下さい。なお、封筒の表面左下に「公開講座受講申込」と朱書願います。  
「受講申込書」の受付が受理された方には、受講番号を付した「受講票」を折り返し返送します。

要項の請求：募集要項の必要な方は、国際言語文化研究科事務室まで直接お越し頂くか、または、返信用封筒(80円切手貼付のこと)を同封の上、下記申込先まで請求して下さい。

申し込みと：名古屋大学大学院国際言語文化研究科事務室

問い合わせ先 住所：〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL：052-789-5245・4833 [AM9:00～PM5:00]

FAX：052-789-4873

ホームページ：<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/events/2006/kokaikoza-2006.pdf>

「受講申込書」及び「受講票」に記載される個人情報、当公開講座を運営するに当たり必要な業務を行うために利用します。それ以外の目的のために利用、又は提供することはありません。また、これら個人情報の管理や利用は「名古屋大学個人情報保護規程」に基づき適正に取り扱います。